

支那骨董拾說

第一集

第一集

支那骨董世襲

崇文會聚行

支那骨董叢說第一集目次

卷一 陶器

唐窯

宋窯

明窯

清窯

餘論

卷二 紫泥茶壺

起原

原料

樣式製作

欸識

種類

名工

茶壺圖

餘論

引用書目

(陶器部)

博物要覽	格古要論	窯器肆考
留青日札	鐵網珊瑚	清秘藏
遵生八牋	香祖筆記	陶說
景德鎮陶錄	通雅	客餘茶話
老學庵筆記	在園雜誌	窯器說
春風堂隨筆	秋園雜佩	陽羨名陶錄
陽羨茗壺系	青磁考	茗壺圖錄
陶器考	本朝陶器考証	萬寶全書

緒言

支那の骨董を鑑定せんには必ず書籍と實物とを兼て研究せざるべからず單に書籍の上に就て研究せるものは地圖を按じて形勝を論ずるが如し身一たび實地に臨まば見るところ聞くところと異なり前山後水能く其名を舉るもの少なし又單に實物に就て研究せるものは賣卜者の運命を判ずるが如し惟古來俗學の解釋即ち形似の上に就て論ずるに過ず陰陽消長泰否往來の眞理を知るにあらざれば何を以て能く人生の禍福を説ん製作の楷模、作手の品流、様式の變遷等一切の原委を悉すにあらずれば何を以て能く骨董の眞實を辨ぜん米元章言あり曰く

好事家と鑒賞家と自ら是れ兩等に屬す家に資力多く名を貪り勝を好み物に遇へば財を抛つて收置するもの之を好事家といふ天資高明多く傳録を閲し或は自ら畫を能くし或は畫意に深く一圖を得ることに終日寶玩、古人に對するが加く聲色の奉と雖も奪ふ能はざるもの即ち是れ賞鑒家なり此の言専ら畫に就ていふも推して之を擴むれば骨董と雖も亦此理に外ならず今や我國書畫骨董の流行迫に前代に軼し都鄙に論なく苟も數人相會すれば書畫を品し骨董を評せざるなし洵に昇代の餘澤にして風氣の高尙に赴けるを徵するに足るも惜いかな好事の人多くして賞鑒の人稀なり此は全く人々業務に忙はしく研究の餘暇なきによるべけんも一は簡單に研究すべき資料の乏

しきに坐せずんばあらず予夙に骨董の癖あり年來意を此に寓
せるも家貧にして名器を買ふの餘資なし僅に書籍の上に就て
其の一斑を窺ひ知れるに過ず所謂圖を按して形勝を説くの流
なるも性の好むところ一物を獲るごとに書籍と對照して其の
原委眞實を研究し老の將に至らんとするを知らず去年の秋病
に因て閒を得、嘗て閲せる各書の中より骨董に關せる事項を
摘譯し且己が平生見聞せるところも思ひ出るまゝ筆を走らして
之を附記し篋中に秘め置けるを同好の人々聞傳へて切に刊行
を慫慂せらるゝまゝ遂に支那骨董叢説と題して世に公にする
ところなしぬ然れど其の記するところは概ね古人の説を敷衍せ
るに過ず固より博雅の君子に示すべきものにあらず彼の業務

に忙はしく研究に意あつて暇なき人々の爲め聊か津梁の便に
供せんと欲するのみ讀者幸に予を以て妄となす勿れ

大正二年癸丑の瓜月

氷壺軒主人誌す

和漢年代對照畧表

支那の古玩を研究せんには勢ひ本邦の年代と對照せざるべからず今他書を
 編くのを省かん爲め茲に唐以後の年代畧表を掲ぐ蓋し此の書載るところ
 多く唐以後の事に係るを以てなり

支 那

日 本

○唐

高祖 武德元年

○推古天皇 二十六年

大正二年ヨリ
 起算セル概數
 (千二百九十六年)

太宗 貞觀元年

○全 三十五年

高宗 永徽元年

○孝德天皇 白雉元年

中宗 嗣聖元年

○天智天皇 十二年

睿宗 景雲元年

○元明天皇 和銅三年

玄宗 開元元年

○全 六年

全 天寶元年

○聖武天皇 天平十四年

肅宗 至德元年

○孝謙天皇 天平八年

代宗 廣德元年

天平勝寶 七年

(千二百五十一
 年)

(千二百一
 年)

德宗 建中元年 ○光仁天皇 寶龜十一年

順宗 永貞元年 ○桓武天皇 二十四年

憲宗 元和元年 ○平城天皇 大同元年

穆宗 長慶元年 ○嵯峨天皇 弘仁十二年 (千〇九
十三年)

敬宗 寶曆元年 ○淳和天皇 天長二年

文宗 大和元年 ○同 四年

武宗 會昌元年 ○仁明天皇 承和八年

宣宗 大中元年 ○同 十四年

憲宗 咸通元年 ○清和天皇 貞觀二年

僖宗 乾符元年 ○同 十六年

昭宗 龍紀元年 ○宇多天皇 寬平元年

昭宣 天祐二年 ○醍醐天皇 延喜五年 此間後梁、後唐、後晉、後周、南唐晉、周等五代十國あり

○北宋 太祖 建隆元年 ○村上天皇 天德四年 (九百六
十七年)

改元二 乾德 開寶

太宗 太平興國元年 ○圓融天皇 貞元元年 (九百五
十一年)

改元四 雍熙 端拱

淳化 至道

真宗 咸平元年

○一條天皇 長德四年

(九百二十年)

改元四 景德

大中祥符

天禧 乾興

仁宗 天聖元年

○後一條天皇 治安三年

(九百四十四年)

改元八 明道

景祐

寶元 康定 慶曆 皇祐

至和 嘉祐

英宗 治平元年

○後冷泉天皇 康平七年

(八百六十三年)

神宗 熙寧元年

○同 治曆四年

(八百五十九年)

改元一 元豐

哲宗 元祐元年

○堀河天皇 寬治元年

(八百四十一年)

改元二 紹聖 元符

徽宗 建中靖國元年

○同 康和三年

(八百二十六年)

改元五 崇寧 大觀

政和 重和 宣和

欽宗 靖康元年

○崇德天皇 大治元年

(八百一十二年)

高宗 建炎元年

○同 二年

(八百一十二年)

改元一 紹興

孝宗 隆興元年

○二條天皇 長寬元年

(七百六十四年)

○南宋

改元二 乾道 淳熙

光宗 紹熙元年

○後鳥羽天皇 建久元年

寧宗 慶元元年

○同 六年

改元三 嘉泰 開禧

嘉定

理宗 寶慶元年

○後堀河天皇 嘉祿元年

改元七 紹定 端平

嘉熙 淳祐 寶祐 一開慶

景定

度宗 咸淳元年

○龜山天皇 文永二年

恭宗 德祐元年

○後宇多天皇 建治元年

端宗 景炎元年

○同 二年

帝昀 祥興元年

○同 弘安元年

此間遼金二國あり

○元

世祖 至元十七年

○同 三年

成宗 元貞元年

○伏見天皇 永仁三年

改元一 大德

武宗 至大元年

○花園天皇 延慶元年

仁宗 皇慶元年

○同 正和元年

(六百八
年六百四)

(六百三
十八年
六百二
十一年)

(六百六
十二年
六百五
十二年
六百五
十一年
六百四
十年)

(七百二
年)

(七百三
十七年
七百三
十二年)

改元一
延祐

英宗 至治元年

泰定帝 泰定元年

明宗 天曆元年

文宗
至順元年

順宗 元統元年

改元二 至元 至正

○明

惠帝 建文元年四年

太宗 永樂元年二十二年

仁宗 洪熙元年一年

宣宗
宣德元年十年

英宗 正統元年十四年

景帝 景泰元年 七年英宗再祚八年

憲宗 成化元年二十三年

孝宗 弘治元年十八年

○後醍醐天皇 元享元年

○同
正中元年

○同
嘉曆三年

○同
元德二年

○同
元弘三年

○養龜山天皇 正平廿三年

○後小松天皇 應永六年

○同
十年

○同
三十二年

○同
三十三年

○後花園天皇 永享八年

○同
寶德二年

○後土御門天皇寬正六年

○同
長享二年

(五)百九十五年
(五)百九十二年
(五)百八十八年
(五)百八十六年
(五)百八十三年

[illegible]

永正三年

大永二年

永祿十年

天正元年

元和六年

七年

寬永五年

正保元年

寬文二年

享保八年

元文元年

寬政八年

文政四年

嘉永四年

文久二年

明治八年

四十二年

年五十三
年六十三
年七十三
年八十八
年九十七
年百一十
年百一十五
年百二十
年百二十七
年百三十四
年百四十二
年百五十八
年百六十八
年百七十八
年百八十九
年百九十九

支那骨董叢說第一集卷一

氷壺軒主人纂述

陶器

陶器の事諸書に散見すれども専門の書甚だ少し、蔣祈の陶畧、瀋陽唐公の陶成記、練水唐氏の窯器肆考等其の間互に詳畧あり、往々隔靴搔痒の感を免がれず、獨り朱笠亭（乾隆年間の人）著すところの陶說、其の晩出に係るをもて、諸書を網羅して異同を考へ說今、說古、說明、說器の四則に分ちて記述頗る詳なり、往年陶工木米此の書を得て大に喜び、研究多年、遂に其の法を得て一代の名工となり、後ち此の書を翻刻し山陽翁の序を請ひて其の傳を廣め、又葛因是も此の書に訓點を施して刊行せしが、孰れも漢文に係るをもて解讀に苦しむもの多し、近年京都の陶工三浦竹泉之を邦文に譯し旁注を施して刊行せり、其

効洵に異とすべきも惜いかな註釋多からざるをもて尙は十分に解しがたし且技
 術に關する書は間術語或は俗語を難へ尋常字義を以て解釋すべからざるものあ
 り、予嘗て彼土に在りし頃陶說の中解し難き語を擧げ親しき支那人に問ひたる
 に、往々即答し能はざるものありき、彼土の人すら此の如し況して邦人に於て
 をや、予の茲に述るところも亦此の陶說を本とし傍ら諸書を考へて熟語の通じ
 難きものは務めて注釋を施せるも、聞見寡陋未だ以て讀者をして全く遺憾なか
 らしむる能はず、況して形狀色澤に至つては最も筆墨の能く寫し出し難きも
 のあり、要するに神にして之を明にするは其の人に在るのみ
 支那陶器の原始は遠く神農の時代に在り、當時は唯瓦器のみにて釉水を用ゐず
 釉水は何の代に始まりしか分明ならざれど晋の時に缥瓷の名あるを見れば當時
 既に青磁の行はれしを知るべし、然れど陶說に古窯（窯は陶器を焼く窯なり、
 支那にては陶器を稱して窯器といふ）は唐の越州窯を以て最始とすれば其の技

別 陶器の類

術の進歩して多く世に行はれしは唐代以後なるべし、

支那の古窯は青色を主とし白色之に次ぐ、青花(染付)は宋代に原始せるも明初に至り始めて盛んに製造し、五彩(五色)の彩色を施せしもの我國の錦手の類)は全く明初の創製に係る、茲に陶説の載るところに就き其の種類と窯名を類別すれば大約左の如し

○青磁

- 唐の越州窯 白色も
○吳越の秘色窯
○後周の柴窯 所謂雨過天青の色
○宋の汝窯
○宋の官窯
○宋の修内司窯
○宋の哥窯
○宋の龍泉窯
○宋の董窯

以上皆な青磁窯なり、其の内越州窯、秘色窯、柴窯等は年代久しく今の世に傳はるものなし、現に我國にて古青磁と稱するは汝窯以下の數種なり

○白磁